

非・所有の恋愛論

— 所有から同一化へ向けて — 金原ひとみ「蛇にピアス」

大西永昭

—

身体が日常において殆ど意識されないということは、人間の行う基礎的な動作を一つずつ思い描いてみれば容易に理解できる。何かを見るとき、目を意識してから見るという行為を始める者はいないし、何かの感触を確かめるのに、自分の指を意識してから触覚を得る者もまづないだろう。人間の意識は常に身体という存在を透過して、或いは消去して、外部へ向かっていく。そうであるが故に、怪我や病などで異常をきたした身体に直面したとき、人は動揺する。恐れ、不快を感じる。「蛇にピアス」(単行本『蛇にピアス』集英社、二〇〇四年一月、初出『すばる』二〇〇三年一月)の冒頭を読んで多くの読者が感じたであろう不快感も、恐らくはそのことに由来する筈である。

スプリットタンというのには主にマッドな奴らがやる、彼等の言葉で言えば身体改造。舌にピアスをして、その穴をどんどん拡張していつて、残った先端部分をデンタルフロスや釣り糸などで縛り、最後にそこをメスやカミソリで切り離し、スプリットタンを完成させる。と、彼は手順を教えてくれた。ほとんどの人はこの

やり方で 改造するらしいけど、中にはピアスなしでいきなりメスを入れる人もいるという。大丈夫なの？ 舌噛み切ると死ぬんでしょ？ っていう質問に、蛇男は淡々と答えた。焼きゴテを当てて止血するんだよ。手っ取り早いけど、さすがに俺はピアス使ったね。ピアスでやると時間はかかるけど、いきなり切るより綺麗な切れ目が出るんだ。私は血まみれの舌に焼きゴテを当てるシーンを想像すると、腕に鳥肌が立った。

リアリズム描写でもないこの箇所の語りには、人が生理的な不快感を覚えずにいられないのは、これが意識されない筈の身体を余りにも直接的に突き付ける記述だからである。決してこの〈身体改造〉に伴う痛み of 想像のみが人を不快にさせるのではない。(身体改造)によって身体を意識させられることに、人は不快を感じるのである。何故か。それは、そのような行為が、そのような身体が、「自然」ではなく「異常」だからである。

三浦雅士は『身体の零度』(講談社、一九九四年二月)の中で、次のように述べている。

むろん、現代人も化粧もすれば衣服も身につける。耳にはピアスをし、髪を切つては熱処理までして加工する。睫にマスカラを付けもすれば、爪を切つてエナメルを塗りもするのである。刺青をする人間もいれば、整形手術をして若さを保とうとするものもある。しかも、必ずしも美容上、健康上の理由によつてというわけではない。潜在的には、装身具の多くは、いまなお呪術的な力を持つと見なされているといつていい。

にもかかわらず、人間の身体とは何かと問われれば、人は一般に「裸で何も塗らず、形を変えず、飾らない人間の身体」と答えるだろう。それが現代人の身体についてのイメージであるといつていい。

三浦は更に「そのような身体を、標準的な人間の身体であると思ふようになったのは、「きわめて後世の、一般的ではない文化的達成」である、と詳述していくが、ここではそのことについては措く。重要なのは、我々が加工しない、即ち「身体改造」しない身体こそを「自然」な人間の身体と看做す立場から、スプリットタンのような加工された身体を「異常」と断じ、不快感すら覚えるということである。

そう考えると「蛇にピアス」の主人公ルイが、「異常」な身体であるスプリットタンを「蛇男ことアマ」に初めて見せられた時の反応は、一般的な人間の感覚を逸脱しているといわざるを得ない。「舌に見とれ、（……すごい）と漏らし、（君も、身体改造してみない？）という言葉に（無意識のうちに首を縦に振っていた）ルイには、現代人が忌避する「異常」な身体に惹かれる性質が見出せる。そもそもルイは

アマと出会う以前から耳のピアスの穴の（拡張にハマつて）おり、スプリットタンに魅了されたのもその延長上のことと理解できる。

誤解のないように断っておけば、こうしたことを「異常」性の論議に還元させるつもりは毛頭ない。寧ろ重点は「異常」ではなく「身体」の方にある。冒頭に述べたように、通常の身体は透明化され人間の意識には上らない。人間の意識に上る身体とは、「異常」な身体である。このテーゼを裏返せば、身体が注視されるためには「異常」性が必要だということになる。このとき要請される「異常」は、ただ身体を浮かび上がらせるための必要条件であり、「異常」であることそれ自体が目的なのではない。あくまで目的は「身体」である。ルイが「異常」な身体に惹かれるように見えるのも、実際には異常な「身体」に惹かれて描かれているのだと理解されねばならない。「蛇にピアス」という小説に描かれているのは、身体をめぐる物語なのである。

二

人間にとつての身体とは何か、と問うてはならない。何故なら、その問いの形式には、人間の意識を主体とし、その主体に客体としての身体が如何に従属しているのかを定義しようとする認識が最初から潜んでいるからである。「人間にとつての身体」という言葉自体が、古典的な心身二元論に発するものとまず理解しておかなければならない。人間を精神／身体として捉える心身二元論において、デカルトが精神と身体の関係の小舟を操る水夫の比喩で表したように、精神こそが「私」の本質であり、身体はただの物体に過ぎないとされてきた。

ルイがそうした心身二元論者であることは、次の記述からわかる。

「死んだ後の事なんてどうでもいいわ」

私は肩をすくめてみせた。死人に口なしって言葉があるように、何事にも感想を述べられないなんて、そんな無意味な事ってない。だから私は墓石なんか高い金を払う人間の気持ちとは分らない。自分の意識が宿っていない身体になって、興味はない。私は自分の死体が犬に食われようと知ったこっちゃない。

一見極端な暴論のようにもみえるが、いわれている内容自体は遙か昔から繰り返し議論されてきた問題である。死体は「私」であるか否か、そういった類の問いである。ルイはそれに「否」と答える。彼女が価値を見出すのは、意識という「私」である。こうした心身二元論の枠組み自体が今では、フロイトが人間の心に無意識という自分自身でも知り得ない領域のあること、また、ソシエールが人間は自分の意思ではなく言語の制度性の中で言葉を発していることを、それぞれ指摘したことによって、人間の主体性は崩され、無効化されたことは自明となっている。現代の日本で展開された身体論でも、市川浩や廣松渉、大森荘蔵、養老孟司など、多くの論者が論旨は異にしながらも、心身一元論の立場をとっている。

しかし、だからといって、身体が「私」に所有されるモノに過ぎないという認識が、人間の意識から完全に駆逐されてしまったわけではないだろう。寧ろ今でも依然として一般的な認識の大勢はそちらの方にあるのではないだろうか。例えば、売春を行う者の「身体は売って

も心までは売らない」という発想、或いは、臓器売買によって自分の身体器官を売り、金銭を得ようとする発想、これ等に共通しているのが、身体と精神としての「私」を切断可能なモノと看做す意識であることは想像に足る。市川浩は心身一元論的身体認識から「私」と身体の関係へ「われわれは身体をもつのではなく、身体である」^(原典ママ)（精神としての身体」勁草書房、一九七五年三月）と規定している。すなわち、「私」が身体である限りにおいて、そこに所有という関係は生じない。「私」と身体の間に関係が生まれるのは、あくまで「私」が身体を客観的対象として眺めるときである。ならば、自分の身体に貨幣価値を見出し商品として客体化するとき、身体は「私」の所有物となる。「蛇にピアス」でも、ルイが刺青彫り師のシバに龍と麒麟の刺青を背中に彫ることを依頼をする場面で次のようなやりとりが見られる。

「アマのと同じくらいの大きさで、背中に収めて欲しいの。幾らくらいかかる？」

シバさんはうーん、と宙を見上げ、エッチ一回、と言って私を横目で見た。

「そんなんでいいんだ」

ルイは、刺青を彫ることを商売としているシバに、金銭ではなく自分の身体を差し出すことで、背中に刺青を入れて貰う。ここで身体は貨幣の代替として機能している。そして、それは身体は貨幣価値として売ることができるということを表している。

現代社会において、合法／非合法を問わなければ、およそ売買でき

ないモノは無いといわれる。金銭が至上価値と看做される社会において、一円でも多く金銭を獲得したいと考える心理は、恐らく現代人ならば一応理解できるだろうし、金銭を得るためにあらゆるモノを売買の対象にしようとする心理もまた理解の範疇にあるだろう。金銭を得るためには、何かを売らなければならない。「私」にとつて売ることの可能なモノとは、「私」の所有しているモノだけである。それは河野哲也が、ウィリアム・ジェームズやエルンスト・カッシーラーを引きながら（所有物は、自己と非自己、主観と客観という二元論では割り切れない中間的な領域に属している）⁽¹⁾と指摘するように、所有が主／客に対して両義的に関わる以上、身体を商品化＝客体化する売る行為の前段階として、必ず経過しなければならない認識だからである。売るためには、まず何であれそのモノを所有しなければならぬ。「私」は所有しているモノだけ売ることができるのであり、所有していないモノは当然ながら売ることができない。身体は最初から「私」の所有物ではなく、売る対象として身体へ向けられる眼差しによって所有物として意識されるようになるのである。

所有されたモノは、常に放棄される可能性に晒されている。それは来るべき次の交換に備えるということでもあるが、「この私」と「このモノ」との単一的な関係においては「私」によるモノの放棄ではない。所有とは、放棄の前段階としてある。或る意味で、人は放棄のために所有するともいえる。少なくともルイは、そのことを意識するともなく悟っている。自らを所有欲の強い人間だとして語るルイは、所有についての見解を次のように示している。

龍と麒麟は最後のかさぶたを作り、それも完全にはがれ、完璧に私の物となった。所有というのはい言葉だ。欲の多い私はすぐに物を所有したがる。でも所有というの悲しい。手に入れるという事は、自分の物であるという事が当たり前になるという事。手に入れる前の興奮や欲求はもうそこにはない。欲しくて欲しくて仕方なかった服やバッグも、買ってしまえば自分の物で、すぐにコレクションの一つに成り下がり、二、三度使って終わり、なんて事も珍しくない。結婚なんてのも、一人の人間を所有するという事になるのだろうか。事実、結婚をしなくても長い事付き合っている男は横暴になる。釣った魚に餌はやらなくて長い事付合ろうか。でも餌がなくなったら魚には死ぬか逃げるかの二択しかない。所有するのは案外厄介なものだ。でも人は人間も物も所有したがる。

〈所有というのは悲しい〉という感覚的な言葉によって、ルイは、所有がモノの物性を剥奪して無価値なモノへと貶め、やがてその先に放棄があることを理解している。人は、普通何かのきっかけでもなければ、自分の当たり前に所有する身体に特別な価値を見出さない。その意味で〈欲しくて欲しくて仕方なかった服やバッグ〉も所有されてしまえば、所有される以前の価値は失われる。こうした所有の在り方が、モノだけではなく対人間においても適用される、とルイは考えている。それが結婚であり、恋愛という関係においてである。他者を所有可能なモノと看做すことは、他者における主体を認めず、他者をただ自分という「私」に認識されるだけの存在に同定することである。

結婚や恋愛をそうした（一人の人間を所有することと捉える限り、待っているのは価値の失効と更にその先にある関係の放棄だけだろう。このような恋愛関係を無期限に延長させるには、所有しない、また、させないことが重要となる。

ルイのアマに対する態度は、確かに一方的なところが目立ち、ルイ自らがアマを（自分の所有物のように思っていた）というように、所有、もしくは支配ともいえるようなものである。しかしながら、ルイは同時にアマの全てを所有してしまうことも避けている。

「ねえ、アマってさ……」

私はそこまで言って口をつぐんだ。

「知りたい？ あいつの事」

シバさんは一瞬おどけたように宙を見上げてから私を見つめ、首をかしげて言った。

「ん。やっぱいいや。知りたくないかも」

恋人のことについて（知りたい？）と聞かれ（やっぱいいや）と答えてしまうルイには、恋人のことを知悉しておきたいというような欲望は窺えない。寧ろ全てを知ってしまうことを恐れ、避けているようにすら見える。相手の全てを知るといことは、その対象に関する情報を所有するということである。それを拒むルイはアマを（自分の所有物）といいながらも、そのアマを完全に所有してしまうことを回避している。

所有を回避した恋愛とはどのようなものだろうか。例えば、それは

次のような場面で端的に表れている。

「ねえアマ、あんた名前何ていうの？ 天野？ スアマ？」

「何だよスアマって。俺のアマはね、アマデウスのアマなの。

アマが名字でデウスが名前ね。ゼウスみたいでかっこいいでしょ？」

「ふうん、まあ言いたくないならいいけど」

「本当だつてば。ルイは？」

「あんたどうせルイ十四世のルイだと思ってるでしょ。私はルイ・ヴィトンのルイよ」

「あつそ。随分お高い女だな」

私たちはその後もくだらない事ばかり話して、ビールを片手に明け方まで語っていた。

ルイは同棲する恋人であるアマの名前を知らない。バイトも、家族構成も、年齢も、知らない。これはアマにしても同じことで、ルイのことを何も知らない。知らない、というよりも彼等は知ることを拒んでいる。彼等が拒むのは、相手に関する情報、つまり、言葉によって相手を理解し、また、理解されることである。言葉による他者への理解は、人間社会を成立させる基礎的な要件だといえる。彼等はそれを拒否し、社会化されない、身体的な関係の中で結びつこうとする。アマのスピリットタンに触発されて、自らも舌の穴を拡張し始めるというルイの行為も、そうした言語によるコミュニケーションに回収されない、極めて身体的な共感作業である。アルコール依存症のルイと殺意

を自分で（コントロール出来ない）と言うアマ、彼等は、ルイが自身の（ポキヤブラリーの少なさ）を自覚するように、いわば非・言語的な存在なのである。そして、言語によるコミュニケーションを前提とする社会において、それは同時に非・社会的な存在であることを意味する。つまり、非・所有とは、社会∥言語に対する拒否の表明なのである。

この非・社会、非・言語という態度を象徴するのが、固有名の拒絶、ということである。ルイはバイト先で（久々に名字を呼ばれて、私にもそんな名前があった事を思い出す）という程に、普段から与えられた固有名を拒絶して生きている。人間一人ひとりに与えられた固有名とは、人間が社会と関わるために必要な記号であり、また、身体を言語に置き換える認知上の装置である。実際、アマが行方不明になったとき、アマの本名を知らないルイは、警察に搜索願を出すことができないという社会的な障壁にぶつかった。固有名は、決して確定記述の集積には還元できず、単一の人間を直接的に指示する唯一の語である。⁽²⁾即ち、固有名は言語化された「この身体」なのである。社会的な位置と「この身体」への直接指示を行う固有名が担うものは、即ち一人の人間の実体性ともいべきものである。

ならば、互いに名前を明かさなまま、知らないままに継続される恋愛は、相手の実体性に決して抵触することのない、頑なに所有を拒んだ関係だといえる。誤解のないように補足すれば、名前を知らないという状態が所有を拒否するのではない。意識的に、敢えて名前を知ろうとしない意思、他者の実体性に触れないようにしようとする選択こそが、所有に対する拒否の表明なのである。

ルイとアマの間にあるそうした関係に比べると、二人に対するシバの在り方が、実に対照的な、つまり所有することを全く怖れない、支配的なものであることがわかる。神山修一は、ルイがアマの死後、アマ殺害の犯人である可能性の濃厚なシバを自らの伴侶に決めたことについて（ルイの望みは、愛され、所有されることではなく、商品として欲望に満ちた視線を注がれ流通し続けること）であるとし、（あくまでも商品）であるルイは（ある持ち主から別の持ち主の手に渡ったからといって悩んだりはしない。大切なのは、自分に次の交換に耐えるだけの価値が維持されているかということだけだ）⁽³⁾と、ルイの恋愛の相手がアマからシバに替わったことを、ルイを所有する対象の交替とみる見解を述べている。しかし、神山の指摘には「この私」と「このモノ」における一回性の関係が見過ごされている。神山は、ルイとアマ、ルイとシバという二つの関係を均質な所有の関係と看做すことで、交換されても傷つかない（商品）としてのルイという像をみている。だが、実際、ルイとアマ、ルイとシバという二つの関係は、全く対照的な恋愛として描かれている。ルイとアマの間にあつたのは、互いに所有を拒んだ恋愛であつたのに対し、シバはルイを所有することを望んだ。

「ルイ、お前の名前、聞いてもいいか？」

「聞きたいの？」

「聞きたいから聞いてるんだろ」

「私のルイはルイ・ヴィトンの……」

「本名を聞いているの」

「……中沢ルイ」

アマに対しては決して明かさなかつた自分の名前を、ルイはシバにはこのように容易く教えてしまう。それは取りも直さずルイがアマに所有される存在であることを示している。だが、何故アマとの関係においてはある程度執拗に所有を避けてきたルイが、シバにはかくも容易く所有されてしまうのだろうか。それはシバが固有名という実体性を所有することに先駆けて、ルイの身体という実体を既に所有する存在だったからに他ならないだろう。

ルイとアマの身体に施された刺青は、刺青彫り師であるシバによって彫られた。二人は、自分の意志で自分の身体に刺青を彫つたと思つているが、彼等の身体に彫り込まれたのはシバの署名ともいうべき、シバの作品なのである。作品の制作者が自分の作品に向けるまなざしは、作品の所有者の意思とは別に、作品を自分の所有に看做す意識を含んでいる。刺青がただの絵画作品と異なるのは、刺青の施された身体をも含めて一つの作品だという点である。シバに作品としての刺青を彫られた時点で、二人の身体は、所有の対象としての資格を得てしまつている。ヘシバさんには有無を言わせない、絶対的な威圧感がある」とルイが感じるのが、彼女の背中にシバによつて龍と麒麟の刺青が彫られた直後であることも、既にこのときからシバのルイに対する所有が始まつたことを物語るものである。警察からアマ殺害の犯人に繋がる情報を伝えられたルイが、徹底的にアマの身体を弄んで殺した犯人がシバであると、タバコとお香の銘柄の一致だけで確信するのも、元々シバがアマを所有する存在であるということを知つていたからこ

そ、そのような推測が生まれたのだといえる。

所有という関係を拒否しようとしたルイとアマであるが、結局はシバという強力な所有者の前に、再び所有の原理の中へなす術もなく、回収されていき、二人の非・所有を指摘した恋愛は呆気なく破綻してしまう。それは悲劇である。しかし、何より悲劇的なのは、そうした一回ずつの破綻、一回限りの放棄が、全て均質な交換の一つとして看做されない現代という社会の在り様だろう。他でもない「この私」と「このモノ」が、複数的なただの「私」と「モノ」に転落したとき、両者を取り結ぶ関係の重みは果てしなく暴落する。

現代社会において所有と放棄が止め処なく繰り返されるというのなら、そして、それを限りなく空しいというのなら、そのサイクルの外に出たいと、それが叶わないのならばせめて回転を遅延させたいと、願うのは人間にとつてごく自然な心理だろう。だからこそ、ルイは非・所有の恋愛論を生きることを選ぶのである。

三

所有があり、放棄がある。それが延々と繰り返される生を抜け出すことは容易ではない。所有することの拒否、即ち、非・所有という選択ですら、所有する／しないという枠組みの中に捉えられた決断である。非・所有を生きることでは、やがて来る所有—放棄の連鎖を先延ばしにすることしかできない。そして、そのようにすることによってやぐりぎりのところで保たれていたルイの精神状態は、非・所有の関係を壊されることで、急速に崩壊していく。

涙が止まると怒りがこみ上げてきた。歯を食いしばっていると、顎が痛くなった。ガリ、と口の中で嫌な音がした。舌で口の中をまさぐると、虫歯だった奥歯が欠けていた。私は欠けた歯をかみ砕いて飲み込んだ。私の血肉になれ。何もかも私になればいい。何もかも私に溶ければいい。アマだつて、私に溶ければ良かったのに。私の中に入って私の事を愛せば良かったのに。私の前からいなくなるくらいなら、私になればよかったのに。

物語が佳境に入り、恋人のアマが行方不明になったことでルイは酷く取り乱す。錯乱ともいえるような精神状態の中で、ルイは「私」の所有する歯を（飲み込ん）で（私の血肉になれ。何もかも私になればいい。何もかも私に溶ければいい。）と念じる。そこには明らかに同一化への願望が込められている。所有が主―客の分離によって可能な関係の持ち方であるのに対し、同一化の目的は文字通り主―客を合一することにある。客体を「私」という主体に（溶け）込ませることで、「私」は身体を所有するのではなく、「この身体」が他ならぬ「私」であるという認識へと至るのである。そこにはもう放棄される可能性は無い。「私」は「私」である以上、「私」であることを放棄することはできないからである。

それまで所有されていた身体と「私」が同一化し、「この身体」|| 「この私」というシンプル極まりない、しかし、現代社会においては困難なこの定式が成立したとき、心身二元論は破棄され、「私」はもう所有―放棄のサイクルに怯えることもない。アマと付き合い始めた

ルイは、最初からこの同一化を目指してきたともいえる。ルイという「私」は、掛け替えない「この身体」|| 「この私」に同一化することを試みてきたのである。

アマの異常な身体部位であるスプリットタンに触発されて、自らも（身体改造）を行うべく、舌にピアスで穴を開け続けたルイは、その度に（痛み）を感じてきた。丸山茂はこの（痛み）を（スプリットタンとして実現される自傷行為へ見いだされる快感⁴）とみているが、ピアッシングによってルイが感じる（痛み）は、ただの快感としてのみ処理できるようなものではない。ピアッシングとルイの関係を追って見ていけば、それはわかる。

一番最初のシバによって行われたピアッシングは次のように描かれている。

「オッケー？」

シバさんは優しい声で聞き、上目遣いで軽く頷くと、いくよ、と小さな声で言っ指を引き金にかけた。その声でシバさんがセックスしてる所が頭に浮かんだ。セックスしてる時もあんな小さな声でGOサインを出すのだろうか。ガチャ、という音と共に、全身に戦慄が走った。イク時なんかよりもずっと強烈な戦慄に、私は鳥肌を立ててヒクツと短く痙攣した。胃に力が入り、それと共に何故か膣にも力が入った。エクスタシーと同じように、陰部全体が痺れた。パシツという音と共にピアスはピアッサーから離れ、自由になった私は顔を歪めて舌を口の中に戻した。

ここでは確かにルイはピアッシングによって快感を感じている。しかし、ピアッシングを行っているのはルイ自身ではなくシバであり、正確には自傷行為ではない。快感は、そのシバとのセックスを想像する中で連想的に覚えたものである。ルイが自らピアスの穴を拡張する場面は、次のようなものである。

暗くなる前に帰路についた。外は冷たい風が吹いていた。私は一体、いつまで生きていられるんだろう。そう長くないような気がした。部屋に帰ると、舌のピアスを2Gにした。ググ、と押し込むと血が出た。痛さのあまり涙が出た。私は一体何のためにこんな事をするんだろう。アマが帰ってきたら、即喧嘩だろう。私は痛みに苛つきながらビールを一気飲みした。

ルイは、自分が長くは生きられないという、生の不安を感じて、ピアスの穴を拡張する。死とは、ルイにとって「私」の意識が消滅し、身体が「私」の所有でなくなることを意味している。死は、「私」と身体を永遠に分かつ切断である。そのような「死」を想起することで分離されそうになる「私」と身体を、ルイは〈痛み〉によって繋ぎ止めようとしているのである。事実、〈痛み〉についてルイは次のように述べている。

現実味がない。今自分が考えている事も、見ている情景も、人差し指と中指ではさんでいるタバコも、全く現実味がない。私は他

のどこかにいて、どこから自分の姿を見ているような気がした。何も信じられない。何も感じられない。私が生きている事を実感できるのは、痛みを感じている時だけだ。

身体が傷つくという身体上の現象と、「私」が〈痛み〉を感じるという感覚上の現象が同時に起これば、それは「この身体」と「この私」が〈痛み〉を介在することで互いに連関していることの証左として〈実感〉される。ルイにとつての〈生きている事〉とは、「私」が〈他のどこか〉から、〈自分の姿〉（＝自分のこの身体）を眺めるような、「私」と身体が分離された状態を乗り越え、「この私」が「この身体」を引き受ける同一化への意思が生きられることとして理解できる。このとき、〈痛み〉は身体と「私」の同一化を表すただ一つのサインである。ルイが、止め処なくピアスの穴を拡張していくのは、この〈痛み〉を感じることで、同一化への理想を叶えようとするからである。

無論、〈痛み〉を感じ続けるだけで「この私」が「この身体」と同一化できるといような考え自体が幻想に過ぎない。〈痛み〉は所詮ただの〈痛み〉であり、それだけで現実にも同一化を促すようなものではない。それでもそのような仕方に縋らざるを得ないというのが、ルイに現れた悲劇性である。小説の最後で、ルイの舌に残されたのが〈無様にぽっかりと空いた穴〉だけであることが、〈痛み〉によって同一化の幻想に縋ろうとするものの空虚さを物語っているだろう。

当初、身体と「私」の関係の中で捉えられていた同一化という認識は、シバによって非・所有の恋愛が破綻させられることで、逆に強大な自己中心性として振る舞うようになる。それは〈何もかも私になれ

ばいい」というような、他者の存在さえも自己の中に同一化し取り込もうとする独我的な認識である。(私の前からいなくなるくらいなら、私になればよかった)という言葉に表れているように、非・所有の恋愛の相手だったアマを突如失ったことが、ルイをここまで強烈な自己中心性へと駆り立てていったのである。

アマを失ったルイは、アマに(私の中に入って私の事を愛)させるための儀式を行う。それが嘗てアマが(これも一応、俺の愛の証)と言つてルイに差し出したチンピラの歯を、自分の中へ取り込むことであつた。そうすることでルイはアマの愛と同一化しようとする。

シバさんが寝息をたてると、私はリビングでビールを飲んで、あのアマがくれた愛の証を、また眺めた。私は物置になつてゐる玄関脇の棚をあさつてトンカチを手を取つた。二本の歯をビニールとタオルにくるみ、トンカチで砕いた。ボス、ボス、という鈍い音が胸を震わせた。粉々になると、私はそれを口にくんで、ビールで飲み干した。それは、ビールの味がした。アマの愛の証は、私の身体に溶け込み、私になつた。

愛する対象と同一化してしまえば、もうそれ以上、放棄されることに怯える必要はない。所有—放棄のサイクルは閉じ、世界はただ「私」という自己の中でのみ完結される。

初めてルイの背中に龍と麒麟が舞つた時、その龍と麒麟には瞳が入つていなかった。(瞳を描いたら、飛んで行)くかも知れない、とルイがシバに瞳を入れないように頼んだからである。それは龍と麒麟を

自分の背中から逃がさないための工夫だつた。だが、飛んで行くかも知れない、逃げるかも知れない、と考えること自体が、自分と刺青が一体となつていないことの表れである。自分と同一化してしまつたものは、決して「私」の身体から失われることは無い。失われるときは、「私」自身が同時に失われることを意味している。

アマの愛と同一化したルイは、シバに龍と麒麟に瞳を入れることを依頼する。このときのルイは、既に自分と刺青が一体化していることをわかつてゐる。だからこそ、次のように思うことができるのである。

私の背中の龍と麒麟に、瞳が入る。私の龍と麒麟は、目を持つ。命を持つ。いくよ……シバさんの言葉と共に、私の背中に懐かしい痛みが走つた。刺青を入れたあの時、あの時私は一体何のために刺青を入れたのだろう。今、私はこの刺青には意味があると自負出来る。私自身が、命を持つために、私の龍と麒麟に目を入れるんだ。そう、龍と麒麟と一緒に、私は命を持つ。

この直後、目の入つた龍と麒麟を見てシバは(飛んでいかなえかな)と言ひ、ルイが(飛んでつちやうかもね)と答える。龍と麒麟と共に(命を持つ)つたルイは、やがてシバの元から(龍と麒麟と一緒に)飛んで行つてしまふだろう。アマの愛と同一化したルイには、他者による所有が必要がない。誰にも所有されない、自己完結した存在としてこれからのルイは生きていく筈である。そのとき、ルイの舌に空いた空虚な穴も、スプリットタンにはならず、そのまま穴として維持されているだろう。その穴を流れる自分の中にできた(川の流れ)を感じ

ながら、ルイはあらゆる所有に捉えられることなく生きていくに違いない。

注(1) 河野哲也『心』はからだの外にある「エコロジカルな私」の哲学』

(NHKブックス、二〇〇六年二月)

- (2) 固有名は、古典的な言語哲学では、名指しされる個体の性質の記述に代用される語であるとされてきた。この考え方に従えば、例えば「金原ひとみ」という固有名は「二〇〇三年に「蛇にピアス」で第二十七回すばる文学賞を受賞し、翌年、綿矢りさ「蹴りたい背中」と共に第百三十回芥川賞を受賞して話題となった作家。「アツシユベイビー」「AMERIC」「オートフィクション」等の著作がある。」という記述として定義できる。しかし、この考え方が誤りであるのは、仮にもし金原ひとみが「蛇にピアス」を書いていなければ、或いは芥川賞を受賞していなければ、或いは一緒に受賞したのが綿矢りさでなければ、という考えられ得る可能性を想定した場合、「金原ひとみ」という固有名と金原ひとみを意味する記述とが結び付かないことになるからである。ソール・A・クリプキが固有名をどのような確定記述や反事実的設定であっても同一人物を指示する語であると考えたように、金原ひとみは、その確定記述の集積によって金原ひとみなのではなく、ただ「金原ひとみ」という固有名に指示されることによって金原ひとみなのである。そのように考えると、固有名が、記述の代用ではなく、指示する人間の身体に直接結び付こうとする語であることがわかる。固有名は、世界にただ一つだけ、単一の個体である「この身体」を指示する唯一の語だといえる。

(3) 神山修一「自分を商品にすること」「美少女作家」の二十年」

『ユリイカ』二〇〇四年八月

(4) 丸山茂「若者―生と死あるいは「蛇にピアス」―」(『神奈川大学評論』二〇〇四年三月)

(おおにし ひさあき、広島大学大学院博士課程後期在学)